

Zoomによる高校生対象の発音指導

—ビデオオフ&氏名非表示が情意面に与える効果—

Pronunciation Instruction on Zoom for High School Students:

The Effect of Anonymizing the Participants by Turning Their Video Off

on Lowering Their Affective Filter

静 哲人

Tetsuhito SHIZUKA

Key words: 英語発音指導, Zoom, ビデオオフ, 情意フィルター, 英語の歌

Abstract

A group of 66 high school students participated in an approximately 2-hour Zoom session, where the author taught them to sing a hit song in English (“2002” by Anne-Marie) with clear pronunciation. In the coaching phase in the session, the students were individually requested to solo sing a designated one or two lines in the song, immediately followed by corrective feedback on their pronunciation by the author. This had to take place in a fishbowl situation where anyone singing could not avoid being clearly heard by all the other participants. To make such a face-threatening activity as less intimidating as possible, the author had arranged such that the students join the Zoom session anonymously, with their video off and their names replaced with numbers. The participants’ post-hoc open-ended verbal comments and responses to Likert-scale questions revealed that this no-face-no-name arrangement had generally served its purpose, to the extent that most students found the session both fun and instructive.

1. はじめに

1.1 本論文の目的

筆者は過去に3回、群馬県前橋市にある私立・共愛学園高等学校に出張して特別授業を実施させていただいてきたが、2021年度には同様の特別授業を初めてZoomを使ったオンライン形式によって実施することになった。本論文ではそのときの全体の様子、参加者の声、そしてとくにビデオオフで氏名表示なしという試みが参加者の情意フィルターに与えた効果について報告する。

共愛学園高等学校に出張するきっかけは2014年に本学入試広報課を通じていただいた、「発音を中心に歌を使ったグルグルメソッドの指導をして欲しい」という出前

授業の依頼であった。ご担当のY先生が筆者のことを著書やブログで知ってくださっていたようである。

まず教材としての歌に関してであるが、筆者はこれまで30年以上に渡って英語の歌を発音指導の教材として利用してきた。歌は学習者に対する訴求力が強く英語学習の動機づけになる(Lems, 2018)。何回も繰り返すことで音声技能の自動化を促し(里井, 2012)、リズム面を強化することにもつながる(Mobbs & Cuyul, 2018)だけではなく、音符と音節の対応関係に則らない限りうまく歌えるようにはならないため、開音節基本の言語である日本語を母語とする学習者が閉音節基本の英語音声を得得するために非常に効果的である(静, 2009)と考えるか

らである。歌を練習することで不要な母音挿入が減少したという報告(中田, 2012)もある。筆者はこの理念に基づいて英語の歌を主教材にした授業を開講し、受講生から一定の評価も得ている(静, 2016)。

つぎに「グルグルメソッド」であるが、これは静(2009)で提唱した授業内音声指導の手法の名称である。適当な数のターゲットとする文を決め、適当な時間(数十分程度)、指導者が学習者の間をグルグルと歩き回りながら、学習者が read and look up 形式で発話する文の音声クオリティを個別にチェック・指導してゆく方法である。歌を題材とする場合には、「発話する」を「歌唱する」と読み替えることになる。高校生を対象にして歌をグルグルメソッドで練習し、文化祭で発表するまでの実践なども報告されている(杉本, 2010)。

以上のようなメッセージや実践を筆者が折りに触れ公式、非公式に発信していたものを共愛学園のY先生がキャッチしていただき、出張授業の依頼につながったようだ。

1.1 第1回特別授業(2014年度)

この時は10月に同校に出張し、高校1年生を対象に、You belong with me (Taylor Swift) を使った授業「歌で鍛えるリズムと発音 ~Taylor Swift を歌おう~」を実施させていただいた。その時の様子を筆者はブログに次のように書いた。

37名の女子と1名(!)の男子というクラスでしたが、英語科ということで、おそらく日頃からよく鍛えられており、ここはちょっと難しいかなと思っていたような line も難なくクリアし、最後は全員でノリノリ大合唱大会となりました。

実施後、Y先生がご丁寧に参加生徒からの感想の全文を送ってくださった。読んでみたところ幸い好評を博すことができたようであった。この時の出前授業をきっかけにY先生とは個人的なつながりができ、その後は入試広報を通さずに2年に一度程度、出張授業の依頼をいただくようになった。

1.2 第2回特別授業(2016年度)

2年後の2016年10月には What makes you beautiful (One Direction) を題材に同様の出張授業を行った。様子は以下のものであった(筆者ブログより抜粋)。

2年前にお邪魔した共愛学園高等学校に再び呼んでいただき、こんどは What Makes You Beautiful を題材にした音節感覚養成/発音トレーニングをさせていただきました。

前は38名が相手でしたが、今回は1年生、2年生の英語科あわせて90名! お客様が多いとこちらのやる気感も高まります。おまけに新装なったきれいな礼拝堂が会場で、プロジェクターを映す画面も大きいし、言うことなし。

2年前も「ノリノリ高校生」とタイトルづけをしましたが、なぜか共愛の生徒さんとはケミストリーがいいようで、今回も、抜群ににやりやすく、きもちよく進めさせてもらいました。1時間目は音節の話、2時間は What makes... の実技。

一斉指導とグループワークを組み合わせ進め、適宜会場内を歩き回って質問を受けたり、コーチしたり、といつも大学でやっている授業の通りの感じです。

「じゃあ今練習したところまでをグループ内で確認しあってください。あとで、グループから一人ずつでもらって。。。 (ここで悲鳴!) 誰が出て大丈夫のようにしてください!」とブラフをかけると、必死になってグループ内で collaborative learning を始めてくれる素直さ。いいですね。

で、最後の15分くらいになったので、総仕上げとして、ダメ元で、近くの生徒に、「じゃあ君、1行目を歌ってみて」とマイクをつきつけてみました。

無理なら深追いしないつもりだったのですが、な、なんと、ちゃんと歌うではありませんか!

よしよし。じゃあ、次、2行目を。。。君!と、つぎつぎとマイクを向けると、全員ちゃんと歌ってくれて、進んでいきます。

ひとり歌えば、会場の雰囲気はもうそういうもの、ということになって、全員歌いますね。

もちろん、発音面がいまいちだったり、メロディがちよっと違ったり、という場合も多いので、それはきちんとその場で指摘して、それを修正して、はい、全員で!

という

個人指名→フィードバック→一斉コーラスというサイクルを繰り返しながら、1番はすべて歌えました。

最後の5分は、全員でアカペラコーラスをして、かなりの達成感の中で自然と沸き起こった拍手のなかで終わることができました。

初対面の集団で、マイク付きつけテクニックがうまく

機能したのは、いろいろな意味ですばらしことだと思います。

楽しいひとときをありがとうございました。

1.3 第3回特別授業（2018年度）

さらに2年後の2018年には All I want for Christmas is you (Mariah Carey)を題材にした授業を行った。やはりブログから抜粋して様子を紹介する。

共愛に呼んでいただくのはこれで3回目になります。1回め、2回めとも生徒さんたちとのケミストリーが良く、今回も楽しみにしていました。

過去2回はグルグルを試みたことはなかったのですが、今回初めて、70数名を4人グループにしてのグループグルグルをやってみました。4人で1行ずつ分担して、全員がきちんと歌えたらマル、という例の形式です。

果たしてどうか、と思ったのですが、蓋を開けてみると、やっぱりグルグルというシステムはいいなと感じることができました。初対面の私に対して照れたり臆したりすることなく一人ひとりが一生懸命歌い、グループでマルをもらえたら嬉しがり、ダメだったら悔しがるといふグルグルには familiar な光景が繰り広げられました

2. 第4回特別授業（2021年度）

2.1 形式の変更

第3回から2年後の2020年度は新型コロナ感染症が拡大した年であった関係で出張依頼はなかったのだが、翌年の2021年夏ごろ再び依頼をいただいた。日程調整の結果、感染症が多少なりとも下火になる可能性があると期待された2022年1月28日に第4回の出張授業を行うこととした。

ところが実際に年が明けた頃には新型コロナ感染症のいわゆる第6波が到来し、東京都の一日あたりの新規感染者も1万人に迫る勢いとなった。群馬県でも感染が拡大し、共愛学園高等学校でも感染拡大防止のためオンライン授業に切り替えたという連絡を1月18日にいただいた。もはや出張しての対面特別授業の選択肢はなくなったため、予定した内容はほぼそのまま、オンラインで実施することとした。

2.2 授業の概要

日時：2022年1月28日 10:05～11:55

授業参加者：1年生および2年生、計64名

形式：Zoomによる。筆者は大学研究室からログイン。

生徒は全員自宅からiPadでログイン。

授業タイトル：「英語の歌で発音がうまくなるって本当ですか？本当です！」

授業の趣旨：英語の歌の歌詞の音節がメロディの音符と原則的に対応していることを講義した上で、具体的な曲を用いて参加者に歌う練習をしてもらうことで、発音技能の向上を図る。

題材の楽曲：2002 (Anne-Marie)

2.3 形式に関する克服すべき問題

この特別授業は対面形式で行った過去3回も筆者が一方的に講義するものではなかった。前半の音節についての講義部分でも適宜発問を個人に投げかけて答えてもらい、後半の歌の練習部分では全体でコーラス練習をしてもらいながらフィードバックをし、かつ第3回ではグルグルで一人ずつ歌ってもらってフィードバックをする、というインタラクティブな形式をとってきた。この形をZoom上で実現するためには以下の問題をクリアしなければならない。

(1) 指名の難しさ

対面形式の時も、筆者は初対面の高校生たちの名前は当然知らなかった。会場を歩き回りながら目が合った生徒に「はい、あなた、どうですか？」などと直接指差し法によって答える生徒を決めていた。しかしZoom上では「はい、あなた！」という指名はできない。事前に名簿をもらっておきそれを頼りに指名するのは可能だが、まったく未知の生徒たちを相手に名簿だけでスムーズな指名が果たしてうまく機能するか自信が持てなかった。

(2) コーラス練習の難しさ

筆者の授業スタイルでは、題材が通常の文であっても歌の一節であっても、参加者全員にコーラスで声を出してもらって、その中で発音を聞き分け、フィードバックをして徐々にそのクオリティを向上させてゆくのが重要な一部となっている。しかしZoom上で一斉に声を出すとおそらく通信環境等によるタイムラグが生じるため、これは実現できない。

過去に一度、成人相手のZoomワークショップ内で、歌の一節を20人程度で同時に歌ってみたところ、タイミングが本当にマチマチになり、極度の不協和音になってしまい懲りたことがあった。

全員がミュートにしておけば一斉に声を出すことは可能だが、その声はそれぞれの本人にしか聞こえず、筆者がそれを聞いてフィードバックすることはできない。

(3) 個別発声練習の難しさ

グルグル(静, 2009)とは個別に発声してもらったクオリティに対してフィードバックする手法だが、一斉授業で個人音読をさせてそれに対してフィードバックするのは決定的な違いがある。それは一斉授業での個人音読ではそのひとりの音読音声をクラス全員が聞いているが、グルグルでは音読音声は本人もしくは本人が属するグループのメンバーにしか聞かれない、という点だ。グルグルでは発話する学生は筆者の目の前にいて、筆者に聞こえるだけの声量で発話してアドバイスや評価を受ける。それ以外の生徒/学生は、自分の順番に備えてブツブツと小声で練習しており、その時筆者の前にいる生徒の発話を聞いているわけではない。したがって教室は常にざわめいており、当該の生徒はそのざわめきの中に「隠れる」形で、心理的なハードルを上げて発話することができる(静, 2008)。

しかし Zoom 上では指名された一人が答えている音声を他の参加者に聞かせないようにすることは不可能である。リアルの教室で一人で答えている時以上に、その生徒の声はクリアに全参加者に聞かれてしまう。こうすると「グルグル」の持つ、「自分の声は自分と先生にしかほとんど聞かれていないので、周囲を気にすることなく発声できる」という利点はなくなり、むしろリアルの教室でひとりで答える時以上のプレッシャーがかかるだろう。情意フィルター(Krashen, 1986)が過度に高くなり、最悪の場合、指名してもフリーズしてしまっ一言も発してくれない、ということも考えられ、結果的にインタラクティブな授業は成り立たなくなる懸念があった。

2.4 今回の特別授業の形式

以上の3つの困難を総合的に考え、高校側のY先生ともご相談し、今回は以下の手法を取ることにした。

(1) 予め参加者に1~66の連番を振っておき、Zoom上の氏名の表示もその番号のみにしてもらう。

その番号によって応答してもらう生徒を指定する。

(2) ビデオはオフにしてもらう。

つまり名前ではなく番号で呼ばれ、顔も見えない状況で答えるならば、多少なりとも「衆人環視」の中でひとりで答える/歌うことに対する心理的負担が軽減するのではないか、と期待したのである。参加者の64名は1年生ひとクラスと2年生ひとクラスをあわせた集団である。それぞれのクラス内では普段一緒に授業をうけているわけなので、例えば名前も呼ばれず顔が見えなくとも、声で誰が答えているかはわかってしまうことも多いと思われ

る。しかし学年が違う生徒同士はわからないだろうし、同じ学年であってもわからない場合もあるだろう。たとえばわかったとして、「顔」を隠しておけることによる心理的安心感はあるのではないかと考えた。

しかし名前無し顔出しなしという状況であったにしても、見ず知らずの筆者がいきなり「では〇番さん、ここ歌ってください!」と言って、〇番さんは確実に歌ってくれるかどうか確信が持てなかった。もちろん歌ってくれる生徒もいるだろうが、そうでない生徒も出るかも知れない。しかし一人でも沈黙してしまう生徒が出ると、最悪の場合、沈黙の連鎖が起こってしまう可能性もある。よって番号で指名したら確実に答えて/歌ってくれる、というしかけを準備したかった。そこでY先生に相談の上、次のような「奥の手」を使った。

(3) 積極的な生徒を予め知らせてもらう。

生徒の普段の様子分かっているY先生から「この生徒たちならおそらく間違いなく答えるであろう」という一定の人数分(結果的に22名)の優先番号リストを送ってもらった。まずこのリストにある番号の生徒からランダムに指名してゆき、その生徒たち全員を指名してもまだ足らなかつたらそれ以外の生徒を指名することとした。

2.5 当日の指導手順

当日は表1のような手順で指導を行った。

表1 当日の指導手順および各段階の所要時間

	内容	時間
1	「音節と音符の関係」の講義(パワポ使用)	30.0
2	Music Video(歌詞表示つき)を1度視聴	3.5
	休憩	8.0
3	対訳付き歌詞ファイルで、歌詞の意味・文法構造を確認(適宜発問し指名解答)	20.0
4	発音注意点ハイライト歌詞ファイルを提示し、1~2行ずつ歌う練習(適宜指名し歌唱)	26.0
5	Music Video(歌詞表示つき)を画面ごとに止め、全員ミュートで一斉に歌った(はず)	7.0
	休憩	6.0
6	Ed SheeranとAnne-Marieが歌っているOfficial Acousticビデオを視聴(1度)	3.5
7	カラオケVideoを流し、全員ミュートで一斉に歌った(はず)	3.5
7	まとめ	2.5

注: 時間の単位は「分」

各段階について簡潔に補足する。

1 高校生対象の特別授業に使用している題材で、本学の外国語学部英語学科WEB 体験授業としてYouTube公開 (<https://www.youtube.com/watch?v=Q16866E0epo>)

されている「歌を歌えば英語発音が上達するって本当？—本当です!」で使用しているものとほぼ同一のもの。

2 2002 の公式ビデオに歌詞が表示されるようしたもの。 (https://www.youtube.com/watch?v=I1-an3K9p_jg)

3 歌詞に筆者が対訳をつけたワードファイル (図1)。歌詞はすべての行が大文字で始まるが、複数の行が文法的な単一の文になっていることも多いので、そのあたりを意識させるため、適宜発問しながら確認した。

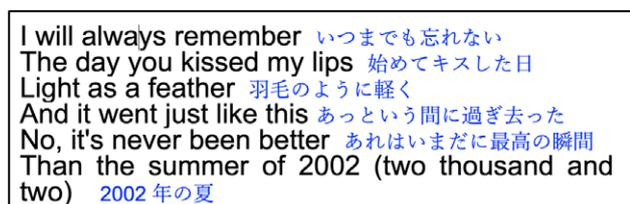


図1 対訳つき歌詞ファイルの一部

4 主な目標分節音 (/r/ /l/ /θ/ / /やリンキング箇所) を色を変えてハイライトしたファイル (図2) を提示しながら、適切に区切って練習した。

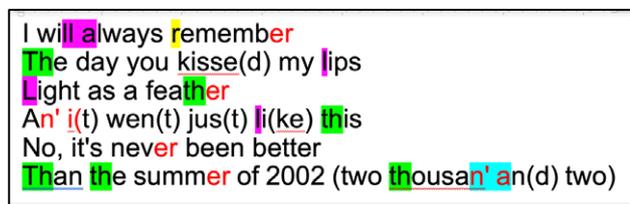


図2 目標音声をマークアップした歌詞ファイルの一部

まず筆者が発音方法や歌詞 (の音節) とメロディ (の音符) の対応関係がよくわかるようにややゆっくり歌ってみせて、指名した生徒に歌ってもらい、フィードバック (評価) し、できる限りうまく発音・歌唱できるよう導いた。

5 Music Video を一時停止し画面に表示されている歌詞部分 (1行ないし2行) を筆者がややゆっくりと肉声で歌ってみせた直後に「はい、どうぞ!」と言って一時停止を解除した。生徒たちは全員ミュートにして動画音声と一緒に歌った (はずである)。単に動画を流して一緒にミュートで歌わせるのに比べ、1行ごとの発音注意点を再確認させる意図で画面ごとに一時停止して筆者のモデルを入れた。

6 カジュアルに部屋でデュエットしている雰囲気動画を視聴させることで曲イメージを更なる定着を狙った。 (<https://www.youtube.com/watch?v=u3ePPA0yzSU>)

7 YouTube 上にあるカラオケ動画の中からキーの高さが適当でかつガイドメロディがついていて歌いやすいものを選定しておいた。

(<https://www.youtube.com/watch?v=X2CYECBSK1Q>)

Zoom の特性上、全員がマイクオンで歌うとタイムラグが生じて劣悪な「合唱」になるためマイクオフにせざるを得ない。その際、単に公式動画を再生してそれに合わせて歌うよりも、カラオケで歌ったほうがこの日の授業の総仕上げとして達成感を得られると考えた。

3 データ収集

3.1 事後の自由コメント

毎回のことであるが、今回も特別授業終了後すぐに Y 先生が参加生徒に感想文を書かせたものを送付して下さった (実施後数日)。

3.2 事後のリッカート尺度アンケート

参加者が「ビデオ・名前表示なし」についてどう感じたかを探るため、無記名式で事後アンケートを行った (実施後約2週間)。具体的手法としては、担当の Y 先生を通じて Google Forms で実施したデータを送付していただいた。

4 分析

4.1 自由コメント

自由コメントは56名が書いてくれた。総13,302文字、平均237.5文字であった。これらのコメントを質的データ分析ソフトウェア MAXQDA2022 で読み込み、帰納的かつ試行錯誤的にコーディングを反復した結果、最終的に図3に示す7つの大コードにまとまった。

▼ ● 📁 コードシステム	401
> ● 🗣️ これまでの状態の認識	56
> ● 🗣️ 今回の授業で感じたこと	76
> ● 🗣️ 今回の授業で学んだこと	82
> ● 🗣️ 今回の授業内での自分の変化	32
> ● 🗣️ 題材の歌「2002」について	28
> ● 🗣️ 今後に向けての決意	70
> ● 🗣️ その他	57

図3 大コード一覧とそれぞれに属すセグメント数

「コードシステム」とある行の右端の数字 401 は全コメントのなかでコードを付与したセグメントの総数を示す。セグメントとはひとつのコメント内にある特定の内

容に言及している部分のことである。各大コード行の右端の数字はその大コードにまとめられたセグメントの数を示す。ひとりの参加者のコメント内に複数種類のセグメントが同定された場合には、それぞれに対して別々の小コードを付与している。大コードにまとめたとき、最も多かったのは「今回の授業で学んだこと」(82件)、次いで多かったのは「今後に向けての決意」(70件)である。以下、各大コードを展開して小コード別のセグメント数を示す。

「これまでの状態の認識」を展開した様子(内訳)を図4に示す。(なお大コードを展開すると、内包される小コードとその頻度が表示され、大コードの頻度は0となる仕様である。以下同様。)

▼	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
										15
										13
										11
										5
										4
										2
										2
										2
										1
										1

図4 「これまでの状態の認識」

「洋楽・歌うのはもともと好きだ」に15件、「発音には自信がなかった／難しいと思っていた」が13件、「音節は気にしていなかった」が11件であった。

「今回の授業で感じたこと」を図5に示す。今回の授業で感じたこととしては「楽しい授業だった」が36件と圧倒的に多く、「ためになった・貴重な時間だった」が15件、「解説に納得できた・発音指導がわかりやすかった」が13件と続いた。

▼	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
										36
										15
										13
										3
										3
										2
										1
										1
										1
										1

図5 「今回の授業で感じたこと」

「今回の授業で学んだこと」を図6に示す。学んだこととしては、当然ながらテーマであった「日本語と英語の音節の違いを学んだ」が多く、34件、音声変化・発音方法などを学んだ」が14件、「歌が英語学習に効果的であることを学んだ」が11件あった。

▼	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
											34
											14
											11
											9
											5
											2
											2
											2
											1
											1
											1

図6 「今回の授業で学んだこと」

「今回の授業内での自分の変化」を図7に示す。「発音・歌う技能の上達を感じた」が15件あり、「最初は不安だった・緊張した・ドキドキした」にコーディングされる内容が9件あり、「緊張がとけていった・安心できた」が3件あった。

▼	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
										15
										9
										3
										2
										2
										1

図7 「今回の授業内での自分の変化」

「題材の歌『2002』について」を図8に示す。「2002がうまく歌えるようになって嬉しい」が最も多かった。

▼	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
											7
											4
											4
											3
											3
											2
											1
											1
											1
											1

図8 「題材の歌『2002』について」

Q1. あなたは指名されましたか？

「はい」が25名、「いいえ」が32名である。指名された25名のうち、21名があらかじめ提供された「優先指名リスト」にあった生徒で、4名がなかった生徒である。

Q2. ビデオオフ（顔出しなし）だったことで、自分が指名されて答える／歌う際の抵抗が少なくなった、と思いますか？（強くそう思う5～まったくそう思わない1）

表2 ビデオオフの効果

1 指名されたか	度数 行%	2	3	4	5	合計
1 指名されたか	いいえ	2 6.25	1 3.13	10 31.25	19 59.38	32
	はい	1 4.00	1 4.00	5 20.00	18 72.00	25
	合計	3	2	15	37	57

表2に結果を示す。57名中37名が5、15名が4と回答している。1と回答した生徒はいない。

Q3. 氏名表示なし（番号のみ）だったことで、自分が指名されて答える／歌う際の抵抗が少なくなった、と思いますか？（強くそう思う5～まったくそう思わない1）

表3に結果を示す。1「まったくそう思わない」という回答が1名いた。これは男子で、自由記述に「男子は極端に人数が少なかったので氏名を表示しないことによる効果はあまりなかったと思います。」と回答していた。全参加者64名中、男子は2名であった。

表3 氏名なしの効果

1 指名されたか	度数 行%	1	2	3	4	5	合計
1 指名されたか	いいえ	1 3.13	2 6.25	1 3.13	8 25.00	20 62.50	32
	はい	0 0.00	1 4.00	2 8.00	7 28.00	15 60.00	25
	合計	1	3	3	15	35	57

Q4. ビデオオフ（顔出しなし）でかつ氏名表示なし（番号のみ）だったことで、自分が指名されて答える／歌う際の抵抗が少なくなった、と思いますか？（強くそう思う5～まったくそう思わない1）

表4に結果を示す。ビデオオフと氏名なしを組み合わせただけでさらに効果が強まった、ということはなさそうである。

表4 ビデオオフ&氏名なしの効果

1 指名されたか	度数 行%	1	2	3	4	5	合計
1 指名されたか	いいえ	1 3.13	1 3.13	1 3.13	9 28.13	20 62.50	32
	はい	0 0.00	1 4.00	1 4.00	5 20.00	18 72.00	25
	合計	1	2	2	14	38	57

Q5. ランダムに指名されたことで、次に指名されるかも知れない、と思い、より集中して参加することができた、と思いますか？（強くそう思う5～まったくそう思わない1）

表5に結果を示す。Q2以上に同意の度合いが強いことが見て取れる。

表5 ランダム指名の効果

1 指名されたか	度数 行%	2	3	4	5	合計
1 指名されたか	いいえ	0 0.00	0 0.00	5 15.63	27 84.38	32
	はい	1 4.00	2 8.00	6 24.00	16 64.00	25
	合計	1	2	11	43	57

Q6. あのやり方について、以上の他に思ったことがあれば、教えてください。

この設問に実質的な回答を書いていたのは11名いた。以下に11名全員のコメントをQ1～Q5の回答と合わせて紹介する。

コメント(1):「とても授業に取り組みやすかったです。」
(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果5/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果5)

コメント(2)「ビデオオフで歌を歌うため、より恥ずかしがらずに集中して授業に取り組めたと思う。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果5/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果5)

コメント(3)「呼ばれるまでは次来るかもと緊張していましたが、自分の番になって指導していただいたら、楽しくて、もっと教わりたいと思いました。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果4/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果5)

コメント(4)「私は指名されませんでしたでしたが、ビデオオフや番号のみ表示にする事でより授業を積極的に楽しんで行うことが出来たと感じました。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果5/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果4)

コメント(5)「実際のところ、同じクラスの人は名前がなくても声で分かっていたのですが、もう2年も同じクラスでやってきているのでそこまで気になりませんでした。とてもやりやすい環境だったと思います。ありがとうございました。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果4/ビデオオフ&名前なし効果4/ランダム指名効果5)

コメント(6)「声でなんとなく誰が歌っているのかわかる。」(指名された/ビデオオフ効果2/名前なし効果2/ビデオオフ&名前なし効果2/ランダム指名効果5)

コメント(7)「声でわかってしまうので恥ずかしかったです。そして歌えませんでした。反省しています。コロナ禍で不可能かもしれませんが対面でやった方が雰囲気も出て歌いやすい気がします。」(指名された/ビデオオフ効果3/名前なし効果3/ビデオオフ&名前なし効果3/ランダム指名効果3)

コメント(8)「全てオフの状態に参加することができたので先生のアドバイスなどを聴いて自分自身で大きい声で練習することができたことが良かったです。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果4/ビデオオフ&名前なし効果4/ランダム指名効果4)

コメント(9)「他のひとよりも多く読んだり歌ったりしなくてはいけなかったのが嫌でした。指名される人は、ほぼ同じくらいの量を読んだり歌ったりするようにして欲しいです。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果5/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果2)

コメント(10)「男子は極端に人数が少なかったので氏名を表示しないことによる効果はあまりなかったと思いま

す。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果1/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果5)

コメント(11)「特にありません。指されて歌いましたが、すごく楽しかったし、またやりたいと思いました。1年に3回くらいの頻度であの授業はやりたいです。欲張りすぎですね。」(指名された/ビデオオフ効果5/名前なし効果5/ビデオオフ&名前なし効果5/ランダム指名効果5)

5 考察

共愛学園高等学校での特別授業は過去3回とも良い雰囲気気で実施させてもらうことができていたが、第4回の今回もまた概ね成功であったと考える。

頂いた自由コメントを今回始めて質的分析ソフトウェア MAXQDA でコーディングしてみた結果、より客観的に参加者の感想内容を可視化することができた。典型的な参加者像は以下のようにまとめてよいであろう：

「洋楽・歌うのはもともと好き」だったが「発音には自信がなかった」し「音節は気にしていなかった」。今回の授業で「日本語と英語の音節の違い」や「音声変化・発音方法など」を学び、また「歌が英語学習に効果的である」ことも学んだ。「最初は不安だったが」、練習するなかで「発音や歌う技能の上達を感じた」結果、「楽しい授業」でありかつ「貴重な時間だった」と感じる事ができた。「今後は発音/音節に気をつけて話したい、音読したい」し、「歌いたい」、また「英語に意欲的に取り組みたい」と考えている。

これまでの3回との大きな違いは、今回初めて Zoom 上で開催したということである。従来も個人を指名して歌わせ、即時フィードバックするという事はやっていたが、それはあくまで対面での「グルグル」形式の中での話しである。対面グルグルでは指導者である筆者が自分の顔を注視しているなかで歌わねばならないというプレッシャーはあるものの、その声が聞こえるのは筆者とせいぜい半径2メートル以内の数名である。それ以外の生徒たちはそれぞれ自分の練習で忙しいので、その瞬間筆者にチェックされている生徒の声はほとんど聞いていない。だからグルグル最中の教室は基本的にざわついていて、その喧騒のなかであるからこそ、発音や歌唱することに対する心理的ハードルが下がっていた。

ところが Zoom 環境ではそれが全く変わってしまう。指名された以外の生徒はマイクをミュートにしてあるの

で喧騒はゼロである。(仮に全員マイクをオンにしておけば喧騒は作り出せるだろうが、それは指導が不可能な喧騒になるだろう。対面であれば、最も物理的距離が近い目の前の生徒から発せられる声を、周囲の物理的距離が遠い複数生徒が出すざわめきから聞き分けるのは容易いが、Zoom 環境ではそれは不可能だ。どの生徒の音声も基本的には同等の音量で聞こえるし、その中で指導すべき(そのとき初めて聞く)生徒の音声を聞き分けるのは不可能だからだ。

Zoom 環境においては、発言／歌唱するひとりの参加者の音声は他の全参加者にクリアに聞こえてしまうのを防ぐすべは、他の参加者が自分の端末の音声をオフにする以外には、ない。端末音声をオフにしてしまえば、リアルな教室で自分の練習に集中しているのと同じような状況は作り出せるだろうが、リアルな教室と違って入ってくる音声ゼロになるので Zoom セッション全体で起こっている状況の把握が難しくなり、自分がどのタイミングでミュート解除して「復帰」すべきなのかわからないだろう。

そこで「参加者音声は常に全員にクリアに聞こえる」というのを所与の条件として、その中で参加者がソロで歌唱して指導されることの情意フィルターを少しでも下げること考えたときに、(1)全員のビデオをオフにし、(2)氏名も番号表示にする、という方策を考えただけである。リッカート尺度アンケートの回答を見る限り、ビデオオフで名前は番号表示という設定は、期待通りの効果があったと言える。ビデオオフに関しては、91.2% (52名/57名)の生徒がそれによって、指名されて答える／歌う際の抵抗が少なくなったと答えている(5「強くそう思う」と4「どちらかといえばそう思う」を合計した数値)。この傾向に関して、実際に指名された生徒と実際には指名されなかった生徒の間に違いは見られない。つまり指名されたことを想像してみても、実際に指名されてみても、そのような効果を感じた、ということである。

氏名なしに関しても同様の傾向があった。氏名なしによって心理的抵抗が少なくなったと回答したのは、87.7% (50名/57名)であった。やはり実際に指名された、されないによる違いはない。ビデオオフによる効果よりも2名ではあるがわずかに少なくなっている。ビデオオフについて1「全くそう思わない」という回答はゼロだったのに対し、氏名なしについては1「全くそう思わない」がひとりはいた、という事実からも、氏名なしも効果はあるが、比較するならばやはりビデオオフの効果のほうが強い、と解釈できるように思う。

念のため、ビデオオフでかつ氏名なしの効果についても尋ねてみたが、効果があったと回答したのはビデオオフ単独と同じ91.2%であった。特に相乗効果あるいは交互作用は観察されなかったようである。

全体から見ると少数ではあるが、ビデオオフについても2「どちらかといえばそう思わない」という回答した生徒が3名いた。この3名とも氏名なしについてもやはり2「どちらかといえばそう思わない」と回答している。このうちの2名については Q6 の自由記述に無回答なので効果を感じない理由については不明であるが、残りの1名はすでに紹介したコメント(6)「声でなんとなく歌っているのがわかる」を記入してくれている。こうしてみるとビデオオフの効果あまりないと感じたのは、普段一緒に授業を受けている集団なので声でかなりの程度わかってしまうからと感じたからだと推測できる。

最後にランダム指名の効果に関しては、94.7% (54名/57名)が効果ありと回答している。ランダムに指名することが集中力の持続に効果的であるのは間違いなさそうである。

6 まとめ

従来対面方式で実施してきた高校生対象の発音指導を初めて Zoom で行い、参加者の自由記述コメントとリッカート尺度アンケートの結果を分析した。皆の前で英語の歌をソロで歌い、その際の発音を指導されるという状況の心理的ハードルを下げるため、参加者のビデオオフ、氏名の表示なし、という方式を採用したところ、期待通りの効果が確認された。今後も Zoom は利用されていくことが予想されるが、ビデオオフおよび氏名表示なしという方式は、発音指導の際のひとつの有効なオプションとして利用してゆきたい。

指導する側としても、発音の適否を純粹に音声だけで判断できるという点、参加者の表情の変化などが(良くも悪くも)気にならない点で、慣れてしまえばむしろやりやすい、という感覚を少なくとも筆者は持っている。このため成人対象の発音セミナーを Zoom で実施する際も、このビデオなし、氏名なし方式を原則にしている。普段から一緒に授業を受けてよく知っている者同士の集団だった今回の高校生参加者と異なり、まったく見ず知らずの参加者が集う成人対象のセミナーの場合には、このビデオなし、氏名表示なしというアレンジが、参加者の情意フィルターを下げる効果はさらに大きいのではないかと予想される。次回の成人対象セミナーにおいて同様の事後アンケートを実施してみるつもりである。

謝辞

本特別授業に関してすべてのアレンジをしてくださった共愛学園高校の吉野隼先生と、積極的に参加しかつ事後にコメントを寄せアンケートに回答して下さったすべての生徒のみなさんに心より感謝申し上げます。

引用文献

里井久輝 (2012). 「カタカナ発音から英語らしい発音へ～大学生のための効率的な英語発音習得法」 2012年度大学英語教育学会(JACET)関西支部秋季大会. 企画ワークショップ 2. 2012.11.24.

静哲人 (2008) 「『総合英語』統制された喧騒から生まれるもの」 『みちびき』 2007年度号, 関西大学第一中学校 PTA, 46-51.

静哲人(2009)『英語授業の心・技・体』研究社.

静哲人(2016) 「新科目『英語教育学入門A』に対する学生の自由記述コメント：『歌う』授業はどうとらえられたか」 大東文化大学 外国語学会誌 45, 65-79.

杉本智昭 (2010). 「英語の歌を歌おう Let's sing English songs!」 甲南英語通信 20, 15-31.

中田ひとみ. (2012). L2 英語の母音挿入率と歌唱が及ぼす発音向上への効果. 外国語教育メディア学会第 52 回全国研究大会. 2012.8.8.

Krashen, S. D. (1986). *Principles and practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon Press.

Lems, K (2018). New ideas for teaching English using songs and music. *English Teaching Forum* 56, 1, 14-21.

Mobbs, A. & Cuyul, M. (2018) Listen to the Music: Using Songs in Listening and Speaking Classes. *English Teaching Forum* 56, 1, 22-29

使用楽曲

Anne-Marie - 2002 [Official Video]

<https://www.youtube.com/watch?v=I1-an3K9pJg>